Kagahan (clan) Yoriki, Nakamura Yokei's learning and education circumstances and clutural circle

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/366

加賀藩与力，中村豫卿の学習・教育環境と文化サークル

幕末の天保，嘉永年間を中心に

江森　一郎・竹松　幸香*

Ⅰ　この論文の目的と資料の特徴

幕末の下級武士の間には，儒学や武道などの武士が当然習得すべきとされた分野の他に，さまざまな伝統文化の習得が広く普及していた。加賀藩の場合とくにこの傾向が顕著だったと思われ，謡曲をはじめ，生け花，茶道，笛，算術，囲碁，将棋なども広く普及していた。

この論文では，この度入手した加賀藩与力・中村豫卿の日記の弘化・嘉永年間（1844～53）の部分を主として使い，中村豫卿を中心とした学習・教育や趣味活動の実態の概要を紹介する。なお，本論文は，Ⅰ～Ⅳの部分は江森が，Ⅴ文化サークルの部分は竹松が分担執筆したが，本論文は，この史料を活用してそれぞれがあるいは共同してこれから書くであろう論文の序論的位置を占めるものである。

この史料は，金沢市在住，中村夏栄氏のもとに伝えられていた全五冊にわたる自筆日記である。この日記は天保13（1842）年7月18日（旧暦，以下同じ）から始まり，途中断続があるが，明治17年までのものがある。今回報告するのは，主として天保期と嘉永期を中心とした部分である。

この日記は，その存在自体が，一部の近親者以外に知られていなかったが，今回中村夏栄（金沢市在住，所蔵者），屋敷道明（金沢市市立図書館近世資料室），中島光春（金沢市史編纂室）などの諸氏をはじめとする金沢市史編纂室の関係者のご厚意とご配慮により，はじめて研究対象とすることができた。ただし，今回は原本のコピーで解読し，部分的に原本を参照するという形で進めているので，原装を崩せないため，綴じ込み部分の1行から2行が解読不可能な場合があり，その部分の情報を補えなかったところもある。

日記は正式には，著者中村豫卿が，金沢藩校明倫堂助教西坂成庵の私塾・孝友堂の運営の責任者の一人となったと思われる時点から起稿されている。しかし，その前に「覚帳」として天保9年3月下旬（この時孝友堂へ入門した）から13年7月までの自分の漢学の学習課程や孝友堂の課業の概要が，要約して加えられている。途中断絶しているのは，安政4年から文久3年（約6年間）の部分と，慶応2年から明治15年1月14日まで（約15年間）の部分である。

その後，中村家の七尾への転居，金沢への再転居などで関連資料の散逸の機会が多かったとのことである。したがって，これらの部分にかかわる下書き等も部分的に存在した可能性も大きいが，現時点で確認できるのは，『起止録天保の巻』，『起止録弘化の巻』，『起止録嘉永の巻』，『起止録安政・文久・元治の巻』，『起止録明治の巻』と表題がつけられた5冊のみである。

記述の方式は，書名のとおり，朝起きてから寝るまでの行動の記録であり，多くの仲間と頻繁に行き来している事が繰り返し書かれている。特に起床，就寝の時刻が毎日ほぼ一貫して記されているのが特徴といえよう。

幕末・維新期の加賀藩で大きな勢力となった

平成8年9月17日受理
*金沢大学大学院社会環境科学研究科

と想定される大島桃年－西坂正庵の学統の藩校改革の意見書には，各人に起止簿（録）を記させ，これを定期的に提出させて勉学状況をチェックすべきであるという意見書が残されている。助教・大島桃年の意見を学政当局者が批評したものである「学政私考中可採用箇条」の項には，毎日読書の起止相記し……」）とあり，正庵の嗣子西坂成一の[1]意見書にも，同様の事が主張されている。実はこの方法は幕府の昌平坂学問所でとられた方法であった。ともあれ，孝友堂関係者にこれを実践した人物が少なくとも一人存在したことが明らかになった。このような事実が確認できるので，戦災も無かった金沢の地では，他の人物の「起止録」が更に出現する可能性も皆無ではない。

少なくとも初期は，このような目的に沿って記しはじめたと思われるこの日記に，中村豫卿が何をどのように考え，どの様な経過で解決し行動しようとしたかについての記載を求めるのは難しい。また，本人の内面を吐露した部分もほとんど存在しない。この点がこの資料の解釈を難しくしている。また，細字の記載が殆どであり，解読そのものがきわめて困難を伴なう部分が多い。頻出する多くの友人の名前は原則として略語や号で書かれている。侍帳や由緒書（後述）等により判明した部分もあるが，これに対する調査が一部分に過ぎない現段階では，我々もわずかな人物しか本人を特定できなかった。

しかし，自己の日々の勉学と仕事と趣味について，長期間にわたり勤勉かつ克明に記したこの資料は，まずは幕末加賀藩の下級武士の教育文化や交友事情を知る貴重な史料であり，幕末の加賀藩の社会状況，地理，風俗等を確認する貴重な手がかりでもあるといえよう。

II　明倫堂の「天保学政修補」と武士身分

加賀藩藩校明倫堂[2]は，寛政４（1792）年３月に創設され，以後何度かの学制改革があった。豫卿の成長期の天保期にもなると，儒学学習は多くの藩で，ある身分以上の武家の子弟には，事実上必須条件となりつつあった。加賀藩の場合，文政２（1819）年に明倫堂ではじめて「生徒」の春秋二回の試業（弁書-べんがき）を設けた。「弁書」とは，出題された経書の一節について，本文の意味内容，文字・熟語の意味などを説明し，余論も加えるものである。（これも，昌平坂学問所の学問吟味の際の方式と基本的に同じである。）天保10年４月８日になると，「人持以下平士並（後述）以上」の在職中の者を除き，18歳以上29歳以下の者に対し試業の対象にした総試業をはじめた。29歳から39歳までのこの身分のものも，３年に一度の試業をも課すようになっていた。（「天保学政修補」）

なお，嘉永６（1853）年には，試業次第がかなり詳細に決められた。この頃の「当年試業調方等の覚え書き」をみると，[3]「当年都て孟子滕文公上下篇之内，当日惣奉行より被仰渡の章節弁書の筈に候事」とあり，孟子集註の持参を許している。（ただし，細註のある「大全」，「正解」等の持ち込みは禁じている）ここから，総試業の程度がそんなに高くはなかったことがわかる。とはいえ，平士並以上のものが儒学学習を全く避けて通るわけには行かなくなってきたことは，ここに明らかである。

中村豫卿が通い，後に運営の中心の一人となったと考えられる西坂成庵の私塾・孝友堂が[4]数千数百人の入門者があったと伝えられているのも，そういう[5]時代環境が背景となって隆盛になった事が十分想定できる。

なおここで，明倫堂の天保10年の学政修補の内容をもう少し検討しておきたい。

「天保学政修補」の中心は，平士並以上の嫡子，嫡孫の総教育，総試験を目指したものである。もちろん，[6]「平士並以上の二，三男等，および夫より以下御歩並迄の子弟俊異之者は，別段に御取用可有之」などと，下級武士の優秀者に就学の希望を持たせる規定もあったが，これも下級教官に任じるわずかな道を示しているのであり，彼らを広く明倫堂に入学させ，教育してやると言っているわけではない。すなわち，

特に今まで出席が芳しくなかった[7]上級武士である人持組の嫡子，嫡孫の教育を重視したものであった。なお，平士並とは，「射手，異風，町同心，火矢御用，厩方，新番組歩小頭，三十人頭，医者，茶坊主頭，諸小頭，新番組歩」に属する人々である。改革前に諮問を受けた「助教」（明倫堂教官）の意見の中には，下士の子弟の教育に本腰を入れるべきとする趣旨のものも[8]あるにはあったが，財政上の理由も大きかったと思われるが，結局，身分制の補強のためにせいぜい中士までの嫡子，嫡孫の総教育を実施するに止まってしまった。

ところで，豫卿の属する「与力」は，士分ではあったが，御昵近（ごじっきん）以上〈将軍家で言えば御目見以上〉の士分である「平士並」のすぐ下に位置づけられていた。同類の士分のものは，ほかに「大工頭，鷹匠，歩，定番歩，鷹役」などが含まれていた。すなわち与力の身分は，御昵近以下の「士分」であった。加賀藩では御昵近以上の士分は，1,474家あったという。なお士分とは，「御徒士並」以上の身分を言う。「天保13年の受業者出席簿」（後述）には，父親の身分が肩書きとして記入されている。これによれば，出席率の高いものに身分の良い御大将組の嫡子（中黒・左衛門）や，御馬廻嫡孫（篠原新太郎）などの平士以上の嫡子・嫡孫もいたが，この時期の藩校教育対象外の与力以下の子弟や，他家への養子の可能性に望みをかける次男以下や給人の子弟が圧倒的に多い。（詳細はⅤの１を参照）したがって，孝友堂は当時の藩校の教育対象から外された下級武士子弟に対する代替教育機関的性格を多く持っていたと考えられる。

なお，天保10年の「学政修補」では，前からあった月に一回の武士層全体を対象にした身分別講釈聴講の講日そのものの変化はなかった。しかし，聴聞人の区別や日程は，変更された。これ以前は，与力は毎月22日朝５つ半時よりであったのが，毎月17日朝５つ半時よりとなった。この時の同時聴講の他の身分は，「御大工頭子弟共」のみであり，「差し支え」がある時は，22日朝，御鷹匠６組，御徒，定番御徒などのグループに[9]出席する事になっていた。同時聴講を指定された身分をみると，天保10年以前は22日の「御徒」「定番御徒」などのグループと一緒であったが，天保10年の修補以後は，「与力」と「御大工頭子弟共」のみのグループが分立したことになる。これは，与力の聴講者が増えた事を示しているのかも知れない。

なお，豫卿の場合，勉学，修行時代は勿論，「公事場付き御用」の公職についてからも，きわめて真面目に毎月17日の聴講日には出席している。天保13年６月26日の「触れ」（下記年表を参照）に忠実だったということである。

また，豫卿の師，西坂正庵については，[10]太田南圃や[11]森潤三郎の研究があるが，正庵自身が比較的早く死去したからか，幕末の加賀藩の教育，学術文化に大きな影響を与えたと考えられるにもかかわれず，忘れられた存在になっている。正庵の思想や影響の究明自体は，別の機会の課題としたい。

Ⅲ　中村豫卿の生涯，境遇・教養と孝友堂教育の概要

日記中の記述，中村家所蔵の文書，その他からわかるこの日記の著者，中村豫卿の大凡の履歴は，以下のとおりである。

豫卿の父は，明組与力に属する御台所御賄い方であり，百石を食んでいた。加賀藩における与力とは，はじめは武功により任じられ，寄親に所属させられていた。しかし，時代の経過の中で生じる寄親に所属しない無組附与力が，正保（1644～45）頃から「明（あき）組与力」として組織され，寛文７年（1667）には，３年以内に「小立野」並びに「泉」の両所へ引っ越すべく命ぜられた。中村家の属する明組与力は，最も多数がこの小立野の与力町（現金沢大学医学部附近）に住んでいた。豫卿の家もここにあった。

戦乱の時代から遠ざかるほど，[12]与力層は知的

表１　中村豫卿の生涯

年号	西暦	豫卿関係	背景	年齢
文政6.9.19	1823	小太郎（豫卿）誕生		
天保8.			加賀藩天保改革はじまる	
天保8.6.	1837		知行半知借り上げ	
天保9.3.	1838	西坂成庵の塾に入門		16
天保9.10.		明倫堂生徒となる		
天保10.2.22	1839		明倫堂，天保学政御修補	17
天保13.5.			御歩並以上子弟，14歳に達したる者等の届け出告く	
天保13.6.26			諸士の明倫堂講書への出席を促す	
天保13.7.18	1842	起止録，正式開始		20
天保14.3.18			武技に秀でた者，数十人加俸，賜物	
弘化3.3.27.	1846	伊藤主馬殿より、外出差し止め申し渡さる。		24
弘化4.5.1.	1847	伊藤殿へ出，お許		25
嘉永2.5.17	1849	父（御台所賄方）死去		27
嘉永3.10.	1850	明組与力，百石，公事場付き御用加入となる		28
嘉永5.6.	1852		ペリー来航	
嘉永5.10.16		海辺御・番，林源太郎組付き		30
嘉永5.10.11		公事場附き御用定役となる		
嘉永5.11.21			銭屋五兵衛牢死（80歳）	
嘉永6.3.	1853	江戸式台御帳附となる		31
万延1.	1860	横山遠江守跡組才許等		38
文久2.3.末	1862	起止録「再起」		40
文久2.4.28		公事場付き御用定役再役となる		
文久2.7.			西坂西庵死去	
慶応2.5.朔日	1866	妻（組外、中村故丹太夫娘）病死		44
慶応2.11.		後妻（七族，荒井治兵衛二番目娘）と再婚		
明治2.3.	1869	一等中士，刑獄寮承事	加賀藩職制を改む	47
明治2.3.		明倫堂助教		
明治2.8.		三等文学教師加		
明治2.11.		漢学副教師		
明治2.12.		従四位様御次稽古御用		
明治3.7.	1870	艶注館漢学御用兼務		
明治3.11.		艶注館，致遠館と合して辰巳中学東校となる		
明治4.		七尾に転居	廃藩置県	
明治5.	1872	七尾に紹成塾開塾		50
明治15.1.	1882	起止録再開		60
明治26.3.21	1893	七尾の自宅にて死去		71

能力や技能で，家督の維持や立身を図ったと考えられ，小禄ながらも知的，実務的能力や教養に富むものが多く，藩の行政の実質を担っていたともいわれている。与力の数は藩全体で約190名であったといわれる。石高は，60石～300石であるが，侍張によれば100石前後が圧倒的に多い。加賀藩では100石の知行の武士の実際の収納米は，43石余りで，このほか１石について２升づつの蔵敷料を町や村の蔵宿に払わねばならなかった。したがって，金沢では「百石６人泣き８人」という言葉が伝えられていた。この言葉は，天保８年以後の知行「半知借り上げ」以後の状況を指すのかも知れないが，家族数６人がやっとで，８人になるといつも泣いて暮らさねばならないということである[13]。中村豫卿の属した周囲の住人（与力層）の置かれた状況は，少なくとも，豫卿の活躍した時代は誰もが大体このようなものだったと考えられる。

なお，与力より更に下位の足軽以下の「軽輩」が士分の侍に途上で出合った場合は，土下座して敬礼するのが原則であったという。したがって，「御呢近」と「士分」の境界は，武士身分を分かつ大きな二ツの境界であった。両者の中間に属し，知的な実務を担当した与力は，加賀藩の武士の中ではマージナル（境界的）な存在であったといえよう[14]。

Ⅳ　中村豫卿の学習・教育環境

１　西坂塾（孝友堂）と豫卿の修行時代

天保２年藩命により江戸の昇平黌へ遊学した西坂正庵は，天保８年金沢に帰藩し，直ちに漢学教育を開始したといわれている。少なくとも豫卿が入門した天保９年３月下旬には，多くの弟子を持ち，孟子や論語の「会読」を定期的（いずれも三八昼，論語は，11月３日から更に一六朝が加わる）に行っていた事が，この日記からわかる。その他，中級者対象の「質問」，初級者対象の「素読」ももちろん行っていた。すでにある程度の規模の私塾（家塾）を経営していた事は明らかである。加賀藩における西坂の塾は，「[15]済（井口済）の塾に至（シ）らざるものは，衷（西坂正庵）の門に至りて贄をとるもの十の七八に居るという」と言われ，「門人尤多し」と伝えられていたが，その実態は不明のままであった。今回の史料から総合的にみると，西坂塾は，「天保学政修補」の明倫堂の高揚期に隆盛となった事が明らかである。

天保10年の西坂塾の稽古始めは，１月18日，稽古仕舞は，７月７日であった。この間，西坂先生の公務（「四書匯（カイ）参校正御用」など）の都合で日程の変更はあったが，論語・孟子の会読は基本的に継続している。その後，８月から９月にかけて，４，50日間稽古を停止したが，（理由不明）その後は，少なくとも孟子会業は復活し，12月17日が稽古仕舞であった。

天保11年になると，この年は小学の会読が七七昼より定期化された。しかし，論語の会読は無くなったらしい。

天保12年は，大学の会読が定期化（5月20日から，三三昼半日）された。小学の会読は継続されている。この年の稽古仕舞の12月17日には，孟子会（読）が「4年にして大終」とある。ここから，孟子会読は，豫卿入門前から始まっていたことになる。

天保13年の春の稽古開きは，1月8日であった。西坂先生が「四書匯参」完成により[16]味噌蔵町の土地を与えられて転居・新築し，一時的な自宅稽古期間があったが，4月8日には，新たに「成美堂」と名乗って稽古開きを行っている。この時期は，「丹弟」（廣平，丹羽弟次郎）が世話役で大学衍義，「山東」が世話役の先生の大学講釈，「中友」が世話役の小学輪講が，それぞれ20人の規模で行われている。この時には豫卿が参加できる学力に達したからか，あるいは新設されたのか分からないが，「詩会」や「文会」の記事が登場する。以上から，この年は西坂塾の発展の画期であったと考えられる。

天保13年7月18日の起止録の「起講」時に，塾名を済美堂から孝友堂と再び改号したが，この時「門生漸進彼是且百人，毎朝素読可四拾」であった。天保13年7月末日で終わっている「覚帳」の末尾には，「素読人及当時50斗」とある。したがってこの時点で，門生約100人，素読人40～50人の大規模な私塾になっていたと考えられる。

なお，塾の改号にあたり，指導体制を整備した。この原型は，天保13年4月8日の済美堂稽古始めの際につくられたものを下敷きにし，更に組織化したようである。

その概要は，丹羽廣平，中村徳胤，佐藤惕，山東，中村文太郎（豫卿）の五人が月づき6回，順番で二人づつ塾につめ，その日の出欠等すべての管理及び（初級の素読生のグループである丁席）読長への素読を指導する。

春は正月18日開講，秋は七月朔日停講，秋7月18日起講，冬12月望，罷（ひ）講，毎月三八昼質問，毎月15日夜詩廻会，毎月25日夕文会。

また，門生は甲席（約10人），乙席（約20人），丙席（約20人），丁席（約40人）に能力別に分ける。

甲席では，毎月3，7，9朝。7半から5まで会講（当時，大学衍義），毎月6，6朝4時から9時まで説経（大学）。2月，8月5日夕弁書。

乙席では，毎月2，4，8朝。6半時から5時まで講解（当時，論語）。毎月5，9朝，5時から4時会読（論語），3月9月5日夕弁書。

丙席では，毎月3，7朝4時から9時輪講（当時，小学外篇）4月，10月5日夕弁書。

丁席では，連朝6時から4時素読。但し，1，5は除く。毎月10，10は，旬試を挟む。7月朔日，12月15日は，終日（6時から7時）素読温習。このグループの内，四書生の日課は，一事のみ，五経生の日課は，二事。旬試が終わったあと，日課の温習一度である。

ここで，塾の運営に関して注目しておくべきは，骨の折れる素読指導は，2段階の間接教授方式（高弟が読長に教え，読長がまた素読稽古者に教える）をとっているということ。丙席の輪講も丹弟（丹羽弟次郎），中小（中村小太郎，豫卿の従兄弟），西辰（西坂辰之助，正庵の弟），中文（中村文太郎一中村豫卿）で順次指導し，実質的教育はこれらの高弟が行っていることである。

乙，丙席のいずれにもかかわっているのは，丹羽と中村小太郎と豫卿のみである。以上の事及び，豫卿は塾の主要メンバーと考えられる甲席10名の一人であった事が学習記録から分かること。しかも「天保13年受業者出席簿」の中で，豫卿は会読312席で筆頭に書かれており，次の中村小太郎の252席や，丹羽の185席などに比べ，断然多い出席率を誇っていること，後年でも，稽古仕舞の前後に豫卿を中心に受業出席簿の整理をしていることなどから総合的にみて，豫卿は孝友堂の改号初期から，すでに実質的運営者の一人あるいは塾頭に近い存在であったと推定される。

2　豫卿の学習過程

天保９年３月，豫卿の西坂塾への入門時の学習は，小学や（孔子）家語の質問と孟子会読であった。11月３日からは論語会（読）にも参加する。この事から，すでに中級学習者の位置に達してからの入門であったと考えられる。素読の段階は，父親や近所などで教わったのであろう。父親が素読指導を出来たことは，後の日記で豫卿の素読指導の代替者になっている事がある事からわかる[17]。なお，豫卿自身も「せがれ」ができてから自ら息子の素読指導を行っている[18]。

天保10年には，質問は家語が継続し，十八史略や近思録が加わり，十八史略は５月24日に終えている。その他，論語弁書，蒙求･上を終えている。

天保11年１月17日の稽古始めの際の記事に，「毎日素読教えに行く，１，５休日」とある。この頃には豫卿が素読教授の正式な教師として，西坂に認められていたのであろう。この年には，唐本の史記や温公通鑑（資治通鑑）などの大部で上級学習者が読む史書にチャレンジしている。天保12年の７月20日には，祖母の病気と死去による「忌」により２カ月あまりの欠席があるが，それ以外は，大学・孟子・小学の会読のほか，文会，詩会にも参加している記事も出てくる。この頃には，すでに高弟の一人になっていたといえよう。

天保13年７月25日，起止録が書かれはじめてからの彼自身の学習過程を追ってみると，大学衍義，大学説経など甲席のテキストの下読みやその会読参加が主軸であるが，その外，貞観政要を読み，（９月26日）９月27日には「前漢書対読51枚」などとあり，貞観政要会や漢書会を行っている。７月晦日，８月朔日には，[19]別史読合などの項目がある。これらは，大体隔日の丁席の読長の素読の指導や，時々まわってくる丙席の小学外篇輪講のほかに仲間同志で行っており，学習と教育に忙しい毎日である。このほか，山

表２　天保13年秋７月25日より８月８日までの日課

	6つ（午前6時）	4つ（午前10時半）	9つ（正午）	7つ（午後5時）	5つ（午後8時）	4つ（午後10時）以後
7.25		4時より孝友堂塾に入る。	8時半過ぎに弁書5枚写す	6時より貞観政要23枚	5時より大学説経下読	
7.26	6時に起き大学説経下読。5時前より読長素読5人	4時より9時過ぎまで大会3節	9半時より7半時まで北村氏貞観政要会26丁	6時前まで山東与る小学講の下読		6時過ぎより5時過ぎまで弁書二枚，4時に寝る
7.27	6時過ぎに起き，典籍半日		9時過ぎより，7時まで前漢書対読51枚		5時に帰り	8時に寝る
7.28	6半時に起き大学衍義21枚	5半前より，読長7人。四時過ぎより9時まで山崎一篇	9半過ぎより7過ぎ迄槌亭方にて漢書35枚。ついで貞観政要会41丁	6時に帰り，漢書21枚都合56枚		4時過ぎに寝る。
7.29	6半起読長11人	4時より9時まで小学輪講会4章	9時過ぎより7時過ぎまで漢書55丁	6時半より論語会下読み		4時過ぎに寝る。
7.30	7半時前に起き論語下読。6時過ぎより弁書1枚写，読長8人	4時より論会読序3行9時過ぎまで。弁書3枚		7時より別史読合	5時より，弁書半枚。写物都合5枚	4時過ぎに寝る
8.1	6半時に起9時迄御定書写し8枚		9半時より漢書24丁	7時前より別史読合，7半過より正木大学伝3章3節弁書		9時過ぎに帰り寝る
8.2	6時過ぎに坂井稽古学校馬2ツ学校札の分3場（付きて大学衍義欠席）5時過ぎより読長4人	4時過ぎより山崎1篇	9時半より高村貞観政要会29枚，	6時より上木大学の大学弁書清書，		4時に寝る
8.3	6時過起弁書大学3章の末2節上木の分3章全成。4時までその間読長3人	4時より小学会に出，2章		6時過ぎより書写5枚		4時に寝る
8.4	6時に起き大学衍義17枚	5半時前より読長3人	（以下不明）			
8.5	6時過ぎに起き書写5枚	4時過ぎより論語会読3枚	9時過ぎより，7時半迄に大学3綱領弁書清書			5半時に寝る
8.6	6半時に起き読長3人山崎不時足すり1篇	4時過ぎより9時過ぎまで大学説経会5節書写15枚		夜6時過ぎより飲まざる酒に酔り。		4時に寝る
8.7	6時過ぎに起き	典籍4時より小学講解釈1章。書写3枚			5半時に寝る	
8.8	6時過より大学衍義20枚。5半時より読長4人	4半より書写8枚		7半時より坂井		4時寝
（以下　省略）						

崎，坂井など藩の師範人の武芸稽古所（後述）にも通い，前にもふれた通り明倫堂の講義日にも欠かさず（毎月17日）律儀に出席している。以上について，起止録執筆開始後の数日を一覧表形式で書き換えてみたい。（前ページ表２参照）

以上は，旧暦で書かれているから，現在の９月の事と考えてよいだろう。(天保13年は閏月なし）これによれば，この頃の豫卿の通常の起床時間は，６時過ぎ（現在，ほぼ６時過ぎ）就寝時間は，４時過ぎ（10時過ぎ）である。

また，武術の修行や後輩の指導にも忙しい毎日である事が分かる。空いている部分は，余暇や家居などの時間であったと思われる。後の起止録には，囲碁や謡のや外食，仕事等々の記録が頻繁に登場するが[20]，この頃のものは８月６日の「飲まざる酒に酔り」の記述など少数の例外を除けば，完全に勉学と教育の記録である。

ところで，この中で山崎，坂井などと出てくる当時の武芸稽古の実態と武芸方面の豫卿の修行についても簡単な考察しておきたい。

上記図表の山崎は，剣術の師範・山崎岩之丞，坂井は馬術の師範・坂井平六と思われる。加賀藩の武学校・経武館は，寛政期の明倫堂創立と同時であったが，普段の稽古は各師範人（天保学政修補期で68人）の稽古所で行い，経武館では師範人が高弟を連れて，月に1回デモンストレーション的に行う形がとられていた。儒学と同様に，武芸についても何度か奨励策がとられてきたが，天保学政修補以後は，特に力が入れられた。たとえば，天保13年11月には，頭・支配人に配下の武芸勤惰の状況を調査させている[21]。

天保10年時の坂井の稽古日は田中九作，金子正之丞とともに２，３，４の夕方となっている[22]。山崎雅五郎は，29日の夕である。８月２日の朝に「６時過ぎに坂井稽古，学校馬２ツ学校札の分３場(付きて大学衍義欠席)」とあるのは，丁度この稽古割りと符合している。経武館での公式の稽古へ行ったため，孝友堂の大学衍義の会読には出席できなかったのである。山崎については，７月28日の午前に行っている。29日の夕方の記述はないが，やはり，経武館の稽古に行った可能性が大きい。28日はその予行練習であったかもしれない。

すなわち，この頃から，「歩並」（かちなみ）以上の子弟，39歳以下は，いずれかの武芸稽古を義務づけられ，執政の老臣が月並み定日に代わる代わる経武館に赴き，視察した。経武館の出校日に理由無く欠席した場合，厳しく糾明される事となった[23]。のちに１年間(弘化３年３月27日～同４年５月１日）豫卿が謹慎を命ぜられたのは，このことにかかわってである[24]。

表３　天保13年から14年の余卿の武芸稽古

年　月	記　事	参　考
天保13.9.30	４時前より学校終日・馬２鞍馬２匹３場づつ。７時過ぎに帰る。８時頃に生菓子つ賜る。	
天保14.1.23	坂井稽古始。19か条伝授。・馬１鞍	
天保14.2.2	坂井学校・馬１鞍	
天保14.2.14	山崎平（ママ）法始１編	
天保14.3.3	山崎名附，８時より坂井巻物持行	
天保14.5.29	９半に山崎学校基五郎殿（明倫堂に不出座）せくり勝負遣わんとする時後立馬	この頃豫卿（天保14.5）坂井の免許をもらう
天保14.7.18	原田，槍術入門一篇	
天保14.7.29	山崎学校一篇	
天保14.8.23	山崎学校見届け一篇	
天保14.9.29	山崎学校一篇	
天保14.閏9.2	坂井学校馬一匹四場	
天保14.閏9.22	７前に髪結い，７時に湯かぶり，７半に別行に入。同月29日の７半過ぎに帰寝。別行中の事一切書かず。	

なお，当時の起止録から武芸修行関係の目立った記事を拾うと，以下のようである。

天保14年７月18日には新たに槍術の稽古をはじめた。坂井と山崎の学校（経武館）での稽古日はそれぞれ２日と29日であった事が分かる。それぞれの稽古場にかなり熱心に通っているこ

とが後の起止録にも詳細に書き留められている。「文武両道」の理想のもとに本気で修行しているのである。なお弘化２年11月２日には，山崎先生より剣術初段を授かっている。

以上，豫卿の20歳台前半までの今回の史料から分かる事の概要である[25]。

Ⅴ　文化サークル

この章は，私（竹松）が，起止録に登場する様々な文化サークルの歴史的，身分的，地域的性格をこれから究明して行く上での基礎作業の中間報告的な性格が強い事をあらかじめ了承されたい。

中村夏栄氏の元に伝えられている文書類の中に，「天保壬寅歳　受業出席簿　孝友堂」と表題がつけられた長帳が残っている。これは天保13年（1842）夏から冬までの孝友堂の出席名簿で，13丁にわたって出席者122名が出席回数の多い者順に記載されている。なお，ここでは，以下，この帳面を「天保13年授業出席簿」とする。

１　孝友堂塾生の身分構成等について

「天保13年授業出席簿」を一覧表にしたものが表１である。表１をもとに孝友堂の塾生の構成について検討する。

まず，塾生の年齢について検討する。

塾生の天保13年（1842）の時点の年齢は，各家先祖由緒書并一類附帳[26]などの年齢から逆算して，豫卿（中村文太郎）・20歳，中村小太郎・19歳，西坂猪之助・13歳，丹羽弟次郎（推渓）・22歳，大島善之助（稼亭）・17歳，前田徳太郎・17歳，古屋此母・29歳などの年齢がわかっている。

これらの年齢は，日記の場合と同様にそれぞれの人物の特定が困難であり，たとえ人物が特定できても，各人の年齢がわかる資料が残っている例はごく限られているので，あくまで推測ではあるが，ここから孝友堂の塾生は最少は13歳，最高は29歳くらいで17～22，３歳の者が多くいたと考えられる。

また，「天保13年授業出席簿」に記載されている肩書から，塾生には家督相続して公務についても孝友堂に通って来る者と，その肩書に父や兄の身分が記され，本人が家督相続前である者がいることがわかる。ここでは，前者を「家督相続済グループ」，後者を「家督相続前グループ」として２組に分けて検討する。なお，肩書のないものは，便宜上「家督相続済グループ」に含めたが，手がかりが少ないためここではほとんど触れることができなかった。

まず，「家督相続済グループ」の内訳は組外５人，馬廻組４人，家来給人12人，儒者１人，説明なし24人となっている。

加賀藩の職制は「組」に別れており，主に，人持７組，馬廻12組，定番馬廻８組，奥小将２組，表小将２組，大小将６組，組外４組，新番２組，御歩６組，持方足軽７組，手先足軽３組，割場附足軽50組となっていた。人持組は八家（家老家）に次ぐ高禄の藩士が属するものである。馬廻組・大小将組などに属する藩士は平士，御歩組以下の藩士は下士とされた[27]。

組外は，この「組」に属していない藩の給人で，概ね知行200石以下の藩士であったとされている。馬廻組は150石以上の平士が属する組である。馬廻組には150石以下の藩士が加えられることもあったが常例ではない。また，家来給人は1,000石以上2,000石以下の高禄の平士が藩の許可を得て使用する家士のことで，そこに属する者は知行もあまり高くなかったと考えられる。

以上のように，家督相続後，役職に就いても孝友堂へ通う者は下級武士，特に家来給人が多くを占めていることがわかる。ただし，これらの者たちは日常の勤務があるためか，出席日数は「家督相続前グループ」の者たちより少ない。

一方，「家督相続前グループ」の場合，「天保13年授業出席簿」に父親や兄の身分が肩書として記入されている。父親や兄の身分をみると，人持組２人，大小将組８人，定番馬廻組（頭含む）２人，馬廻組（頭含む）14人，組外４人，

定番御歩（頭・横目含む）７人，新番御歩１人，与力４人，御算用者４人，医師２人，儒者１人，神主２人，細工人２人，大工２人，馬医２人，家来給人３人，不明４人となっていが，ここから，(1)「馬廻組」の者が多い，(2)禄高100～200石クラスの藩士が多い[28]，といった特徴が挙げられる。(1)に関しては，藩の職制からみても，馬廻組・定番馬廻組の数は多く，そこに属する藩士の絶対数の割合は多いと思われる。金沢藩の馬廻組・定番馬廻組に属する藩士のはっきりした人数は不明であるが，弘化元年（1844）大聖寺藩の士分以上の人数がわかっており[29]，これによると平士213人のうち馬廻組が87人いる。馬廻組の他は４人（新番組）～35人（小姓組）なので，これと比較しても馬廻組に属する藩士の割合が多いことがわかる。この記録は大聖寺藩のものであるが，金沢藩の支藩である大聖寺藩は諸制度もほぼ宗藩に準じているので，金沢藩もほぼ同じような傾向であったと考えられる。以上のように馬廻組に属する藩士の割合が多いことを反映しているとすれば，(1)の特徴は当然の結果と思われる。

また，子息の内訳は弟９人，嫡子16人，せがれ19人，二男14人，三男４人，四男２人，養子１人，嫡孫３人となっており，「嫡子」「せがれ」「二男」が多い。「せがれ」については，「息子」であるという意味以外わからず，どういう立場の子どもを指すかは今のところ不明であり，これは「せがれ」を除外しての推測となるが，嫡子・二男に比べて三男以下で孝友堂に通っている者はかなり少ない。中・下級武士でどれほどの三男以下の男子が存在する武士の家庭があるかどうかは把握していないが，嫡子・二男と比べると三男以下の数がかなり減るので，三男以下まで特別，教育を施す余裕のある家庭は少ないと考えて，ここからも孝友堂のメンバーは中・下級武士が多かったことが想像できる。以上のことから，孝友堂の塾生は17～22，３歳中心に，基本的に中・下級武士と中・下級の子息で構成されているといえよう。

なお，「天保13年授業出席簿」には「玉川頼母家来給人」が多くみられる。しかし，どの史料をみても「玉川頼母」という人物は存在しない。ところが，幕末の侍帳[30]非常によく似た名前で「玉井頼母」が存在する。また，玉井頼母の弟である玉井久菊という人物が出席名簿にみられるので，「玉川頼母」は「玉井頼母」の誤記ではないかと考えられる。侍帳[31]によると，玉井頼母は禄高5,000石の人持組である。

5,000石の禄高は人持組の中でもかなり高禄である。

2　豫卿と文化サークル

次に豫卿を中心とした文化サークルについて，日記のうち主に『起止録嘉永の巻』から検討を行う。

日記には多くの人物が登場しており，そこから豫卿の交遊関係，行動範囲等を検討し，明らかにすることができる。しかし，先に述べたように[32]日記には特に頻出する人物の名前は号や略語で書かれている場合が多い。ここではまず，特に重要と思われる人物についてその人物を特定し，その上で豫卿を中心とした文化サークルについて考察を行う。

まず，「天保13年授業出席簿」を手掛かりに人物の特定を行う。「天保13年授業出席簿」に記載されている人物のうち，日記に頻出する人物は大島善之介（稼亭），丹羽弟次郎（推亭・推渓），高村清左衛門，西坂辰之助，岸井九八郎(静斎)[33]が挙げられる。「天保13年授業出席簿」からわかるこれらの人物の共通点は，(1)出席回数が多い（ただし大島39席を除く）：このことは先にも触れたが，豫卿(中村文太郎)が最多出席320席，岸井九八郎225席，西坂辰之助207席，高村清左衛門190席，丹羽弟次郎185席でかなり多いことがわかる。(2)出席簿の出席回数は会質と素読のものだが，上記の者はみな会質のみで，素読には出席していない。会質は会読・質問をあわせたもので，学習の進度からいうと中級レベルであると考えられる。また，素読は漢学学習の基

表４　孝友堂　天保13年授業出席者名簿

出席者氏名	授業の種類	出席回数		右欄の知行石高	住　所	備　考
中村文太郎	会質	312席	明組与力中村弥次郎せがれ	100石	馬坂新町	
中村小太郎	会質	252席	組外中村丹大夫せがれ	150石	味噌蔵町	
岸井九八郎	会質	225席	定番御歩岸井太右衛門せがれ			
西坂熊之助	会質 素読	45席 178席	御細工人茂太郎二男	35俵 7 人扶持	味噌蔵町	孝友堂主宰西坂成庵の弟 知行石高は成庵のもの
西坂辰之助	会質	207席	御細工人茂太郎せがれ	35俵 7 人扶持	味噌蔵町	同上
石黒安太郎	会質 素読	45席 162席	御医者弟			
田原鉤三郎	会質 素読	24席 174席				
佐藤善十郎	会質	197席	御歩横目佐藤市郎右衛門嫡子			
中黒豊左衛門	会質 素読	47席 147席	御大将組中黒庄大夫嫡子			
高村清次郎	会質	194席	組外高村？嫡子	(150石)	(弓ノ町)	高村弥門嫡子か
丹羽弟次郎	会質	185席	定番御馬廻丹羽祉大夫せがれ	120石	味噌蔵町	
佐藤清次郎		30席 153席	御歩横目佐藤市郎右衛門二男			
今村甚太郎	会質 素読	59席 122席	御大小将横目今村清次郎せがれ			
山本余所次郎	会質	172席	御馬廻山本長太郎弟			
中黒与七郎	素読	167席	御大将組中黒庄大夫二男			
関　仙次郎	会質 素読	30席 125席	高岡神主関三河守二男			
永山熊之助	会質	145席	定番御歩永山吉之丞二男			
辻　得太郎	会質 素読	24席 116席	仙石帯刀木並多門嫡子			
村上余所男	会質 素読	1席 103席				
篠島新太郎	会質 素読	32席 108席	御馬廻頭権助嫡孫			
石黒熊男	素読	140席	御馬医石黒？嫡子			
堀　千吉	素読	135席	御算用者堀尋助せがれ			
村沢定次郎	素読	135席				
安井叔三郎	素読	134席	組外安井勘左衛門弟			
岸井熊之助	会質	133席	定番御歩岸井卯兵衛せがれ			
三宅弘之助	会質 素読	107席 24席	御大工三宅？せがれ			
高山寿吉郎	素読	120席	御大小将組高山嘉一郎指次弟			
村沢助太郎	会質 素読	2席 112席				
山瀬加一郎	素読	113席				
塩冶弥之助	会質	112席	玉川頼母家来給人			
小森岩之助	会質 素読	32席 75席	御馬廻小森清左衛門嫡孫			
加藤平太郎	会質	107席	玉川頼母家来給人			
石黒万五郎	会質 素読	17席 90席	御馬廻組石黒左門せがれ			
田中又吉郎	会質 素読	7席 96席				
曽田藤太郎	素読	102席	組外田中左助嫡孫			
浅江元吉	会質 素読	65席 34席	御算用者小頭民之助せがれ			
安井勘左衛門	会質 素読	20席 76席	組外			
梅村源次郎	素読	93席	寺西要人家来給人梅村十大夫二男			
金岩文左衛門	会質 素読	27席 63席				
前田清九郎	会質	88席				
小幡吉太郎	会質 素読	21席 68席	小幡左守嫡子	400石	馬場4番丁	
高山乙鉄	素読	84席	御大小将組高山嘉一郎二番目弟			
丹羽庄之助	会質 素読	3席 80席	御歩頭権助三男			
辻　鍬次郎	素読	82席	仙石帯刀木並多門二男			
青木多橘	会質 素読	10席 68席		(800石)	(宗叔丁)	青木多聞」の誤りか
津田平三郎	会質 素読	13席 63席	御馬廻組津田平右衛門嫡子			
森　常三郎	会質 素読	10席 64席	新番御歩辰之助四男	100石	新　町	
梅村　環	会質 素読	1席 73席	寺西要人家来給人			
加藤統吉郎	素読	71席	組外	150石	彦三7番丁	
津田弥三郎	素読	69席	御馬廻組津田平右衛門二男			
吉田文之助	素読	57席	御算用者吉田七郎三男			
大庭随元	会質	66席	御医者大庭探元せがれ	240石	生洲小路	
岩田誠太郎	会質	62席				
丹羽長三郎	会質 素読	4席 56席	御馬廻組			
坂井権五郎	会質 素読	6席 54席	定番頭並坂井小左衛門四男			
林　清次郎	会質	60席	組外御番頭林源多郎嫡子	700石	出羽町	
関　乙三郎	会質 素読	14席 42席	高岡神主関三河守二男			
江上熊之助	会質	51席	組外	200石	与力町	斎藤左次馬方
大橋長三郎	素読	50席	大橋作之丞せがれ	800石	三社町	
石倉兵三郎	素読	50席				
多田宝次郎	素読	45席				
宮崎金太郎	会質	42席				
井口駒次郎	会質	42席	本多掃部家来給人井口貴太郎弟			
古屋外吉	会質	40席	古屋甚兵衛三男			
森　鈴　吉	会質	39席	御医者森快安嫡子			
大島善之助	会質	39席	御儒者大島清太嫡子			
北村拐四郎	会質	36席	北村与右衛門養子			
宮崎磯太郎	素読	35席				
上木與三郎	会質	31席				
高井信湊	会質	31席	高井陸奥守嫡子			
神田重三郎	素読	31席	御歩横目神田九郎右衛門三男			
井口庄一郎	会質 素読	3席 25席	前田兵部家来給人			
佐藤武吉	会質	27席				
前田兵太郎	会質	24席	御馬廻組聡五郎嫡子			
岩田広次郎	会質	23席				
寺西鹿之助	会質 素読	6席 16席	御馬廻寺西源左衛門せがれ			
大平隣太郎	素読	22席				
山本朝左衛門	会質	21席	御大工山本？せがれ			
宮崎主殿	会質	20席				
篠島熊之助	素読	20席				
荻原富三郎	素読	19席				
荻原常三郎	素読	17席				
渡辺錄三郎	会質	16席	定番御馬廻渡辺十兵衛せがれ			
太田久三郎	素読	16席	御大小将組太田勘左衛門弟			
古屋孫三	会質	12席	御大小将組古屋小源太弟			
小原玄輔	会質	12席				
奥野伝次郎	会質	8席	御馬廻組			
神田久五郎	素読	8席	御歩横目神田九郎右衛門二男			
森　善　治	会質	6席	新番御歩森辰之助二男			
加藤龍男	会質 素読	3席 3席	玉川頼母家来給人			
坂部銀太郎	会質	6席	玉川頼母家来給人			
武貞右衛門	会質	4席	組外			
今村余所八郎	会質	4席	御馬廻組			
中山半蔵	会質	3席	村井勘負儒者			
吉田新之助	会質	3席	御算用者吉田七郎せがれ			
大田耕作	会質	2席	御馬廻頭小大田又助せがれ			
神田清次郎	会質	2席	御歩横目神田九郎右衛門嫡子			
早川純吉	会質	2席	玉川頼母家来給人			
島川牧太	会質	2席	玉川頼母家来給人			
津田酒造		1席	御馬廻組	400石	彦三8番丁	
古屋此母		1席	御馬廻組古屋新左衛門嫡子	400石	味噌蔵町	
深田監太郎		1席	深田主馬嫡子			
玉井久菊		1席	人持組玉井頼母弟	5,000石	白髪町	
坂部昌次郎		1席	玉川頼母家来給人			
平野新太郎		1席	玉川頼母家来給人			
早川保一郎		1席	玉川頼母家来給人			
早川豊次郎		1席	玉川頼母家来給人早川理兵衛二男			
津田源太郎		1席	御大小将津田＊＊＊せがれ			
福山永太郎		1席	組外	500石	小将町	
前田徳太郎		1席	御馬廻組前田弥五作嫡子	350石	宗叔町	
中山康之助		1席	組外中山？二男			
中村駒之助		1席	本組与力中村平大夫せがれ			

＊は判読不明

礎である。つまり，上記の孝友堂の人物は漢学学習の初級レベルはすでにマスターし，会読・質問のレベルに学習進度が進んでいとる考えられる。これは天保13年時点の進度なので，嘉永年間にはもっと進歩していると思われる。以上の点から，孝友堂の塾生の中で日記に頻出する人物は，ある程度学力・実力がある西坂の高弟であったと考えられる。また，「1．孝友堂の塾生の構成」で述べたように，大島善之助や丹羽弟次郎などの豫卿と年齢も近い者が多いと考えられる。

次に豫卿の親族の特定を行う。日記に頻出する親族には，「叔父」，「小太郎」，「井三」，「井佐」などがいる。これらは明治3年に豫卿から氏族長へ提出された「先祖由緒并一類附帳」[34]によって，ある程度特定できる。例えば「叔父」は中村丹大夫を指し，「天保13年授業出席簿」にも登場する中村小太郎[35]はこの丹大夫のせがれで，豫卿にとっては父方のいとこになる。なお，豫卿の最初の妻は中村丹大夫の娘である（慶応2年5月に病死）。「井三」は豫卿の母の父，つまり母方祖父，井口三事を指す。「井佐」は「井三」のせがれ井口佐太郎（母方いとこ）のことである。

以上のような人物とともに豫卿は詩文会，碁，謡などを行っている。これをもとに豫卿の周辺の文化サークルのいくつかの側面を明らかにしていく。

(1)　詩文会

詩文会は孝友堂でも定期的に開かれている。日記からは詩文会が嘉永2年（1848）に特に多く行われていることに気づく。その前後をみると，嘉永元年（1847）の詩会は2回（7月11日稼亭・列松，11月7日丹羽推亭・稼亭），嘉永3年（1849）の詩会は3回（1月16日，2月4日，2月20日）で，これらと比較すると嘉永2年，特に9月・10月に多いことがわかる[36]。

嘉永2年に行われた詩会のメンバーは，主に大島善之助（稼亭），丹羽弟次郎（推渓），圦斎，佐藤列松，好文園の5人で，この5人の組み合わせで行われている。

前出の「天保13年授業出席簿」から大島善之助，丹羽弟次郎は孝友堂での学友であることは分かっている。圦斎は『起止禄・明治の巻』に「徒弟圦橋」と記載され[37]ていることから豫卿のいとこであったことがわかる。日記に頻出していることから豫卿とかなり親しかったと思われる。佐藤列松は，嘉永5年9月晦日に「佐藤市郎右衛門方へ列松居士一周忌に行」と日記にあることから，佐藤市郎右衛門の子息であると考えられる。また，「天保13年授業出席簿」には佐藤市郎右衛門の嫡子と次男，佐藤勘十郎・佐藤清次郎の名がみられるので[38]，列松はこのうちのいずれかで，豫卿とは孝友堂での学友だったと考えられる。好文園は史料が少ないため特定することができず，今のところ不明のままである。

以上のように，詩会はほとんどが孝友堂のメンバーで行われている。儒学において「詩」は最も高級なものであり，また，非常に重視されていた。中国における「科挙」試験は四書五経の条文の解釈を書かせる「教義」，政治・政治史に関する意見を書かせる「論策」，定まった韻律の詩を科す「詩賦」の3つが柱であった。このうち「詩賦」が最も重視され，「教義」「論策」においても内容よりも文学的能力を試す色彩が強かった[39]。その伝統を受け継ぎ，詩・詩作も学問の一環として，会読や質問のさらに上のレベルに設定され，詩会は孝友堂卒業直前の学問の総仕上げとして行われていたと思われる。

嘉永3年（1849）以降，かなり詩会の回数が減少しているのは，嘉永2，3年を境に詩会のメンバーの境遇が変わっており，例えば嘉永3年10月に豫卿が公事場附になったのをはじめ，嘉永3年4月に佐藤列松は江戸へ，嘉永7年（1853）7月に丹羽弟次郎が改作奉行になる等，仕事が忙しくなったり，様々な事情があって，これまでのように頻繁に集まって詩会を行うのが難しい状況となり，詩会の回数も減っていったと考えられる。

表５　嘉永２年に行われた詩会

月　　日	詩会の場所	豫卿の他の詩会のメンバー
嘉永2.4.28	推渓宅	推渓
嘉永2.閏4.1	孝友堂	孝友堂詩文会
嘉永2.閏4.8	稼亭宅	稼亭（詩会中止）
嘉永2.閏4.20	豫卿宅	稼亭，推渓，圯斎
嘉永2.9.9	大樋	圯斎，西坂，白渓，
嘉永2.9.12	推渓宅	列松，推渓
嘉永2.9.21	列松宅	列松
嘉永2.9.25	卯辰山観音院	好文園，稼亭，圯斎，推渓
嘉永2.9.27	列松宅	好文園，推渓，圯斎
嘉永2.9.28	列松宅	列松，稼亭
嘉永2.10.1	列松宅	列松，推渓
嘉永2.10.3	豫卿宅	推渓，圯斎
嘉永2.10.4	豫卿宅	稼亭，圯斎
嘉永2.10.5	豫卿宅	推渓，圯斎
嘉永2.10.8	推渓宅	推渓，圯斎
嘉永2.10.9		推渓，列松
嘉永2.10.11	推渓宅	推渓，稼亭，圯斎
嘉永2.10.13	列松宅	列松，稼亭
嘉永2.10.14	推渓宅	推渓，稼亭
嘉永2.11.17	稼亭宅	稼亭
嘉永2.11.27	豫卿宅	稼亭
嘉永2.12.11	白渓宅	稼亭，推渓，白渓
嘉永2.12.24	稼亭宅	稼亭

(2)　碁

豫卿はかなり碁が好きだった。多くの時間を碁に費やしている。それゆえ，日記の碁に関する記載はかなり多くなるが，ここでは嘉永２年，３年，５年（1849，50，52）の３年分を取り上げ，検討する。

嘉永２年には，豫卿は早川の家に出かけ，早川や近所の人々と打っていることが多い。豫卿の父・中村弥次郎敬忠が書写したといわれる絵図[40]によると，早川数之助と遠田長平は中村の両隣，遠田長平の隣家は水野大作，生山佐大夫は早川の家の裏にある。嘉永２年には，毎日のように早川の家に通って碁を打っており，遠田長平や水野大作，生山佐大夫も早川の家に集まって碁を打っていることから，早川の家が近隣のサロン[41]的存在になっていたのではないかと考えられる。また，各家の「先祖由緒并一類附帳」[42]から推測すると早川数之助，水野大作，遠田長平はいずれも豫卿よりかなり年上で豫卿の父（中村弥次郎敬忠）と同じくらいの年代であること，豫卿の祖父にあたる井口三事(井三)も頻繁にきて碁を打っていることから，嘉永２年の時点では豫卿の碁はあまり上達しておらず，早川や祖父などから手ほどきを受けていたと考えられる。嘉永３年になると，相手は，次第に丹羽（推渓）や大島（稼亭）などの友人が中心となり，碁の技術も上達していったと思われ，師匠的存在であったと思われる早川と碁を打つ回数は減ってくる。さらに嘉永５年になると同僚が中心となってゆき，仕事帰りに同僚皆で集まって，そのうちの一人の家に寄り，碁を打つことを日常としている。同僚として嘉永５年以降，日記に頻出する人物としては青木，辻，永井，土田，松村，山本，斎判，坂井たちがいる。青木は青木重司郎のことで奥村内善方与力，禄高100石，辻は辻安兵衛，永井は永井平右衛門のことで嘉永元年10月に公事場附御用定役になっている。土田は土田源四郎，松村は松村八郎左衛門，山本は山本十郎左衛門，斎藤は斎藤武大夫のことで前田式部方与力，禄高130石，坂井は坂井宇右衛門のことで弘化４年３月前田源五左衛門方与力に召出されている[43]。これらの人々は皆，豫卿と同じ禄高100～150石・与力クラスであったことがわかる。また，碁を打つ回数（日数）は嘉永３年９月の月26日を最高に，１か月の平均日数は月10日ほどになる。通年でみると，嘉永２年93日(月平均６日)，嘉永３年129日(閏月あり月平均10日)，嘉永５年202日(閏月あり月平均15日）と年を追って増えている。豫卿の「碁好き」が益々高じて，の感もあるが，跡目相続をして公事場御用附の役に付くことによって，碁が近所や仕事仲間との社交の場として，跡目相続前よりも，活用されるようになっていったのではないかとも考えられる。

(3)　謡

謡も，碁と同様，頻繁に行われている。特に正月に行っている回数が多い。正月に行った謡曲の曲目をあげると，嘉永２年（1849）は竹生島，朝長，巻絹，高野物狂，嵐山，苅清，室君，善知鳥，八嶋，草紙洗，鉢木，歌占，鶴亀，田

村，船弁慶，求塚，芦苅，山姥，咸陽宮，景清，弱法師，放生石，実盛，海人，猩々である。翌嘉永3年（1850）正月は謡を行った回数も少なく（3日），その曲目は高砂，田村，高野物狂，朝長である。これは，前年に父が亡くなって喪中の正月となるためと考えられる。しかし，嘉永5（1852）年の正月には再び嘉永2年と同じくらいの回数・曲の種類で行われている。このうち，高砂，田村，高野物狂，八嶋，求塚などが正月に必ず行った謡と考えられる。高砂は祝儀の席でよくうたわれた曲なので[44]正月の目出度い月に多く行われたと考えられる。田村，高野物狂，八嶋，求塚をはじめ，その他の謡曲については，私の謡に関する知識が少ないため，ここで詳しく述べることはできないが，皆がよく知っている謡曲がよくうたわれたのではないかと思われる。

また，碁と同様，嘉永2年は孝友堂のメンバーと行っていることが多いが，嘉永3年10月からは斎藤判大夫，永井平右衛門をはじめ職場の同僚の名前が増え出す。特に嘉永5年3月からは日常の練習とは別に毎月定期的に望湖楼を借りて，同僚たちと定期的に謡会を行っており，この当時の金沢で，下級武士の間でいかに謡曲が普及していたかわかる。謡会は毎月17日に春日社の「望湖楼」で，豫卿とその同僚の謡会として開かれている。この毎月の定期的な謡会は文化サークルの一つであると考えるが，このことについて詳しくは，望湖楼のこととあわせ，後述する。

表6　嘉永5年定例謡会

月　日	謡曲題名
3月17日	春日竜神
4月17日	弓八幡，阿漕
5月17日	九世戸
6月17日	山姥，檜垣，住吉詣
7月17日	芦苅，芭蕉
8月17日	満仲
9月17日	大蛇，巴，鉄輪，調伏曽我
10月17日	右近，関寺
11月17日	三輪，安宅
12月17日	道明寺

また，金沢の番代手伝（下級事務役人）梅田甚三久の日記である『梅田日記』[45]には，甚三久が砺波郡高宮村次兵衛ののところに謡の出稽古にいったり，近所の子どもを弟子にとって教えている記事がみられる[46]。

謡曲が武士の間で流行し，町人農民にも普及していたのは全国的な傾向であったが，金沢でも謡が町人，豪農，下級武士にまで普及していたことがわかる。

(4)　茶

茶の湯は嘉永5年（1852）から頻繁にみられるが，それ以前はほとんど見られない。嘉永5年閏2月からほぼ毎日，竹俣祐質[47]に教わっている。茶の湯は竹俣祐質と1対1の練習だけで，数人が集まっての茶会はみられない。茶の湯は，碁や謡のように社交の場というよりも，武士の教養の一つとしてとらえられていたと考えられる。

(5)　生け花

生け花を行っている記事が多いのがこの日記の特徴の一つであると言える。豫卿は冬に牡丹，春に梅・桃・桜，秋に菊・紅葉など節句の日前後にその季節の花を活けている。ただし，生け花については，茶の湯のように師匠について教わっている様子はなく，豫卿の自宅の他，早川数之助をはじめとする近隣宅や大島善之助・丹羽弟次郎などの孝友堂の友人宅にて数人で集まって生け花を行っている。また，花を活ける他，草花屋に行って，草花をながめたり，購入したりしている。草花屋は十一屋にあったらしく，『鶴村日記』[48]の鶴村や『梅田日記』の梅田甚三久も十一屋の草花屋に行っている[49]。また，詩文会や書画会などと同じように「草花会」・「生花会」にも行っている。江戸時代の生け花とい

えば，女子が行うものというイメージがあるが，氏家栄太郎『汲古雑録』の「藩候奥住状況」の中で御遊事として能・謡・舞等・書画・詩歌の他「花」や「茶」もあげられている[50]。藩主にもそのような傾向があるので，少なくとも金沢では，生け花は茶の湯と同様，武士の教養の一つととらえられていたと思われる。

なお，私の経験でも，金沢の旧家を調査すると，必ず，謡・茶の湯・生け花の本が出てくる。このことからも，金沢では町人や中・下級武士にも謡，茶の湯，生け花などの芸事が普及していたことがわかる。

(6)　その他

大島善之助や丹羽弟次郎，職場の同僚を誘っては白山参詣をしたり，卯辰山周辺（寺社参詣含む）・大乗寺山周辺（寺社参詣含む）に遊びに行ったり，卯辰山観音院や寺中(石川郡寺中村)で行われるの神事能見物[51]へ行ったり，軍談を聞きに行ったり，才（犀）川角力，書画会，料理屋で楽しむなど様々な遊びを行っている。豫卿の場合，自宅から近いこともあって観音院参詣（能見物含む）をはじめとして卯辰山周辺を主な遊び場にしていたらしい。これらの遊びは『梅田日記』『鶴村日記』にもよく似た記事として登場している。「起止録」は『梅田日記』『鶴村日記』とあわせて，当時の金沢の庶民の生活の様子を明らかにする史料としての側面もある。

3　サークルの「場」

田中優子氏は「連」はもの生み出す「場」で，「連」が重なり連なっていくものをサークルと呼んでいる[52]。

田中氏によれば「場」は単に空間を表す言葉ではく，人間がいることを前提としている。「場」において人間は「集まったり」「集められたり」するのではなく，人から人へ連なっていく。それゆえ「場」の共有は，人間の側面のみに注目するとき「連」と呼ばれ，そして「場」では互いに影響を受け合い，連なりのなかで才能を発見し，発見され，それを磨き，文化が形となっていく[53]，としている。

表７　「起止録」にみえる望湖楼での詩会・謡会の記事

年　月　日	会	豫卿の他集まった人々
嘉永2.3.1	詩文会	圮斎
嘉永5.3.17	謡　会	斎藤判大夫，永井平右衛門
嘉永5.4.17	謡　会	斎藤判大夫
嘉永5.5.17	謡　会	不明
嘉永5.6.17	謡　会	不明
嘉永5.7.17	謡　会	斎藤判大夫
嘉永5.8.17	謡　会	斎藤判大夫，永井平右衛門
嘉永5.9.17	謡　会	斎藤判大夫，青木重司郎，坂井宇右衛門，山本十郎左衛門
嘉永5.10.17	謡　会	永井平右衛門
嘉永5.11.17	謡　会	永井平右衛門
嘉永5.12.17	謡　会	斎藤判大夫，永井平右衛門

豫卿にとって孝友堂や家は「場」であると考えられるが，ここで「場」として，特に注目したいのは「春日社望湖楼」である。『起止録嘉永の巻』にみられる望湖楼の記事をまとめたものが表７である。

各人の「家」での小さな集まりと違い，「春日社望湖楼」では詩文会，謡会もかなり大規模な集まりが行われていると考えらる。

中村禎雄氏「加賀国学　蔵板欽定四経校刊の顚末」[54]に対する山森青硯氏の解説の中に，望湖楼について，「帝慶山(春日山)の中腹に文政頃，小坂神社の神官で絵師高井二白が建てたものである。……（中略）……此処に定期に当時の文化人が集まり詩作に耽ったと言う。集まった学者に･･･富田景周，野村円平，中沢倹，金沢で初めて望遠鏡を発明した蘭学者松田東英などがある。……」[55]とあり，主に当時の文化人の詩会に使われた，とされているが，日記からは詩会だけではなく，謡会にも使用されており，文人・学者の様々な集まりに利用されていたと考えられる。

また，日記には「春日高井へ行く」（嘉永５年11月22日）「高井へ当27日望湖楼借用之義断紙面調遣」（同24日）などとあることから，使用する際には謡会の代表として豫卿が望湖楼の所有者

である高井二白と交渉していたと考えられる。これまでは孝友堂が豫卿にとっての文化的「場」であったが，仕事を持ち，職場の同僚との付き合いが増えてくると，孝友堂から少し遠ざかり，これまでのように孝友堂は「場」として使用できない。しかも，謡や碁などの様子からわかるように，豫卿は孝友堂の仲間とのつきあいと同僚とのつきあいを別けており，当然，孝友堂は同僚との社交の「場」として使用できない。

豫卿には孝友堂とは別に同僚との「連なり」が形成され，その「場」として望湖楼を使用したと考える。

以上，「望湖楼」は富田景周，野村円平などの高名な学者や文化人たちだけの詩会に利用された場ではなく，豫卿のように，ある程度文化的レベルの高い人が中心となってサークルを形成する場でもあったといえる。

近世の金沢に，望湖楼のような文化的「場」があることは注目すべきであるが，ここで望湖楼の機能などについて十分な検討を行い，何らかの結論を出すには紙数にも時間的にも余裕がない。今回はサークルを調べる前提の調査に時間がかかり，不明点があまりにも多いため，望湖楼については後日稿をあらため考察を行いたい。

4　本章のまとめと展望

日記からは以下のような事実があげられよう。

1．下級武士も様々な趣味に浸っていたことが具体的に分かる。
2．広い交流・身分を超えた交流はみられない。ほとんどは近所，禄高の同じような者同士での交流である。当時の金沢の武士社会はやはり閉鎖的だと感じられる。
3．孝友堂は単なる学習の場ではなく，文化サークルの「場」として謡をはじめとする様々な教養，活動の基礎となっている。その基礎をもとに，さらに，望湖楼の謡会のような新しいサークルを形成していく。

日記に登場する武士は役職に就く前の若い武士が多いため仕事（江戸詰）等で他国に赴くことはないと思われる。また，上級武士の子弟や儒者と違い，他国（主に江戸・京都）に遊学することもほとんどなっかたと考える。また金沢の場合，三都のように異文化が交錯する条件がほとんどなかったことも事実であり，私がこれまで見てきた『鶴村日記』や『應響雑記』の場合[56]のように身分や地域を超えた広い交流が存在していたことは期待できない。

しかし，日記からは孝友堂の文化サークル的な面を基盤として文化を吸収し，交遊を広げていく様子がよくわかる。例えば，豫卿は役職に就いた後，その同僚と新たに望湖楼で新しい文化サークルを形成しているが，これは，ある程度の教養や素養がないとできないものであり，その教養や素養は孝友堂で培われたと考える。まさに孝友堂は「場」であり，「互いに影響を受け合い，連なりのなかで才能を発見し，発見され，それを磨き，文化が形となってい」っていることがわかる[57]。

以上は豫卿を中心に文化サークルの一端を垣間見たにすぎないが，江戸時代の崩壊は身分秩序の崩壊であり，その予兆は身分を超えた文化サークルの自生的な展開に示されると一応考えてよかろう。そうだとすれば，残念ながら，金沢の幕末はいまだ強固な身分制の中での余暇の消化という消極的な文化サークルの段階に止まっていたと仮説しておいてよかろう。今後も文化サークルを中心に，ただの「小京都」，「百万石の城下町」ではない，近世の一大都市としてのダイナミックな金沢の文化を描いていくのが私の課題である。

註

1　日本教育史資料，巻6，雑纂，389
2　ほかに武学校としての経武館も同時に創設された。
3　日本教育史資料，巻2，旧加賀藩学校，184

4　太田南圃：西坂成庵の性行と学説，郷土史叢第12冊，加越能史談会
5　慶応３年の訓導の意見書中に「天保中学政維新の命ありて学校の規制極めて詳悉とす」とある。日本教育史資料，巻６，386.
6　加賀藩史料，第15巻，天保～弘化，61.
7　幕末には，70家あった。八家に次ぐ家柄。知行は14,000石から1,000石。
8　下村宗兵衛意見書，江森一郎：勉強時代の幕開け，平凡社選書131，1990，248以下参照。
9　稿本金沢市史，学事編２，194.
10　太田南圃：同上書
11　森潤三郎：「西坂正庵の調査」補遺，東洋文化，149，30-37．など。
12　大沢由也著，大沢衛校注：青雲の時代史，文一総合出版，23参照
13　八田健一：百万国遠鏡，石川県図書館協会1961，87
14　以上は，日置謙編：改訂増補　加能郷土辞彙，北国新聞社，1973復刻版。石川県：石川県史，第３編，藩治時代，1928。氏家栄太郎：汲古雑録，1940，非売品。などの関連箇所による。
15　日本教育史資料，10-193
16　太田南圃：西坂成庵の性行と学説，郷土史叢第12冊，2.
17　例えば，弘化４年８月９日，12日などの記事に「内１人父授」「内２人父授」などと自注がある。
18　文久２年４月10日以降
19　垂統別史のこと。西坂正庵が天保13年11月29日に「高徳院様」藩祖前田利家の事績をつづり，藩に献上したもの。７冊，考據１冊。
20　弘化３年～４年の自宅謹慎期間が記載内容変化の転機のように思われる。
21　加賀藩史料，同上巻，424.
22　稿本金沢市史，2-273参照
23　石川県教育史，1-41参照
24　この際の弁明書が，中村氏のもとに残っている。別の稽古が遅れて遅刻し，到着の時には，もう稽古が終わっていたとのことである。
25　この史料の巻毎の内容の紹介は，著者が共同で，『市史かなざわ』第２号（1997.3発行予定）に載せた。
26　金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵。
27　日置謙編『加能郷土辞彙』（北国出版社）参照。
28　表１参照。
29　『藩史大辞典』第３巻中部編・雄山閣。
大聖寺藩，弘化元年の平士以上の人数表（これは『加賀市史』通史上巻所収西出家文書「天保15年調家中分限帳」より集計されたものである）より。
30　石川県史第２編付録１
31　同上。
32　Ⅰ　目的と資料の特徴（江森）参照。
33　『加能郷土辞彙』参照。岸井九八郎は画家で，静斎の他，松柏生・白髯居士・領白逸士とも号す。金沢の画家・森西園（森辰之助）に画を学ぶ。なお，森辰之助の三・四男が孝友堂で学んでいる。
34　金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵。
35　表１参照。
36　表２参照。
37　明治15年５月13日の記事。
38　表１参照。
39　儒学における漢詩の位置については，吉川幸次郎「中国の文学とその社会」（『吉川幸次郎全集。』所収）を参照した。
40　中村夏栄氏所蔵。
41　田中優子氏はその著作『江戸はネットワーク』（平凡社，1993年）の中で「連（サロン）」（Ｐ９）としている。
42　金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵。
43　石川県史第２編付録１侍帳，先祖由緒并一類附帳参照。
44　『日本国語大事典』「高砂」の項参照。
45　若林喜三郎編『梅田日記－幕末金沢町民生活風物詩－』（北国出版社，1970年）番代手伝は農政に関する書類の調整を行う御算用場の下級役人である。
46　元治元年（1864）２月３日～12日に宮高村次兵衛のところへ行き，２月３日，７日，８日，11日に謡稽古を行っている。元治元年（1864）閏５月30日「材木丁入口木村屋吉三郎・能とや喜太郎，重而八月七日，嶋屋源太郎入門之事，右人々謡習度旨……今晩始候事」
47　竹俣祐質については，今回の調査では不明であった。
48　石川県図書協会から上中下３巻各２編全６冊で刊行されている。
49　『梅田日記』元治元年５月11日「野田寺町十一

屋江罷越，草花屋ニ入草花見物し」

50　1940年非売品。

51　毎年4月15日に観音院（卯辰山）・寺中（石川郡寺中村）神事能が行われた。能大夫は諸橋と波吉が交代で勤める慣例となっており，日記中に出て来る「波吉能」は能大夫が波吉の番で行われた神事能であると考えられる。

52　田中優子『山東京伝と江戸のメディア』NHK人間大学テキスト，1995年10月～12月期，P27～P36，1995年

53　田中優子『江戸はサークル』平凡社，P9～P23，1993年

54　1958年に「支那学研究」21号に発表されたものであるが，1982年に横川巴人会編　『教育は語り継ぐ　中村禎雄の生涯』（北国出版社）にまとめられた。

55　横川巴人会編『教育は語り継ぐ　中村禎雄の生涯』北国出版社，1982年

56　竹松：近世金沢の文化サークル「社会環境研究」創刊号，P121～P134，1996年

57　田中優子『江戸の想像力』筑摩書房，P73～P81，1986年